

レイモンド新三郷保育園「優秀園実践提案研究会」開催レポート

2022年2月12日（土）、2020年度「ソニー幼児教育支援プログラム」で「優秀園」を受賞したレイモンド新三郷保育園による、「優秀園実践提案研究会」を開催しました。新型コロナウイルス感染防止のためZoomによるオンラインで実施いたしました。認定こども園・幼稚園・保育所・小学校・大学等の教育・保育関係者から異業種の方も含めて約100名（端末数）のご参加がありました。

以下にレイモンド新三郷保育園による開催レポートを掲載します。

実践提案研究会概要

1. 日時：2022年2月12日（土）13:00～16:05
2. 主題：科学する心を育てる
『科学するところ』からの取り組み、同僚性への試行
3. プログラム
 - 1) 園長挨拶 13:00-13:05
 - 2) 研究報告/ブレイクアウトセッション 13:05-15:15
「雨の水って飲めるの？問いからひろがる子どもたちの興味と学び」
 - 3) 講師講評 15:15-16:00
『科学するところ』からの取り組み、同僚性への試行
 - 4) 矢藤誠慈郎 氏 / 和洋女子大学教授 16:00-16:05
副理事長挨拶

研究報告 「雨の水って飲めるの？問いからひろがる子どもたちの興味と学び」

当法人の保育方針のひとつとして「なんだろうのその先へ」というものがある。子どもたちが様々な体験のなかで「なんだろう」と心を動かし、その「なんだろう」のその先の世界へと子どもたち自らが踏み出していく。これらを支える保育が「科学する心を育てる」ことへもつながっていると考える。そんな保育の実践を皆さんと一緒に共有していきたいと思う。

梅雨のある日に「雨は好きか嫌いか」という話題があがる。雨が嫌いな子どもがほとんどで、その理由を訊ねてみると「外で遊べないから」という声。そんな子どもたちの声に対して担任の保育者から「雨の日だって外で遊んでいいじゃない」という投げ掛けに、子どもたちは「楽しそう！」と心躍らせる。後日いざ雨の園庭で遊んでみるとたくさんの発見があった。そんな子どもたちの発見をクラスみんなで振り返りながら共有していると、一人の子どもからふとこんな疑問があがる。

「雨の水って飲めるのかな？」

そんな子どものふとした疑問にクラスみんなで試行錯誤しながら取り組んでみることとなった。活動がすすむにつれて、クラスの仲間や保護者も巻き込んで活動がひろがっていく。そのきっかけやしかけのひとつとして「サークルタイム」や「ドキュメンテーション」があった。

サークルタイムは、毎日子どもたちがそれぞれの顔を見合わせることができるようになるように輪になって話し合う時間。この時間を通じて子どもたち一人ひとりの関心や発見がクラスのものとして共有されることとなった。

また、それらを子どもたちはもちろん、保護者をはじめたくさんの人と共有する手段としてドキュメンテーションを取り入れた。これらによって初めは子どもたちの活動であったものが、次第に保護者や周囲の職員も楽しみにしたり、参加したくなるような活動となった。

こうした一環の取り組みを経て自信を持ち、活動に取り組むことと同時に活動を共有することも楽しみにするようになった。この流れがその他の活動にもうまくつながっていった。そうした保育実践を共有することができた。



はなびはなぜ光るの？ おこめって一緒じゃないの？

課題解決に向けた取り組み

「個の取り組みから園全体での取り組みとするために」

保育実践は研究報告だけを見るととてもうまくいっているように見える。しかし実際は順風満帆なものではなく、実践している保育者も、その周囲の職員も様々な葛藤を抱えていた。園全体としての取り組みとして「科学する心を育てる」保育を実践していきたいが、そううまくはいかない。

そんな課題と課題解決に向けた取り組みを共有する。

園目標は「子どもの育ちをともに喜び合う仲間をつくる！」

そうして仲間を増やすべく、保護者を巻き込み仲間にしたたり、地域を巻き込み仲間にしたたりと保育実践を通じて仲間をつくることに取り組んでいった。保護者や地域など順調に仲間が増えていく一方、もともと仲間だと思っていた職員同士では、より深い仲間の関係を築けていたのだろうか。

「科学する心を育てる」を実践できるような保育を継続して展開していくためには、園全体として一人でも多くの保育者が関心を持って取り組むことが必要なのではないか。しかし一部の職員やクラスだけのものとなってしまっていないだろうか。このような課題感を持って、そうした課題を解決するための取り組みをはじめることにした。



この課題は一言で言うならば保育の同僚性ではないだろうか。

そこで、保育の同僚性を専門とする矢藤誠慈郎先生(和洋女子大学)のお力を借りて年間4回の園内研修を実施することとなった。

その取り組みは、研修時間自体は毎回60分と短い時間だが、往還型の研修となっていて日頃の保育実践とつながっている。



同僚と日々の保育を振り返りながら、自身だけでなく、相手の保育観にも触れていくこととなる。テーマは壮大なものではなく、「保育所保育指針」を基にしたもので、誰もが参加できるものであった。その時間のなかで、立場や職種を超えた話し合いを通じて「保育を語るのが楽しい」と思える関係性が育まれはじめた。

この関係性を基盤に今後の保育にも取り組んでいきたい。

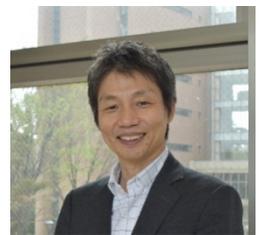
講師講評

『科学するところ』からの取組、同僚性への試行 矢藤誠慈郎氏/和洋女子大学教授

〈研究報告より〉

子どもの姿を見取り、言葉を拾い、それらのどれも意味あるものとして捉えて、子どもに寄り添うことで、様々な可能性を探ることが大切ではないか。

子どもの活動の展開について、個々の保育者の力量の問題にするより、子どもの興味に寄り添い、興味を持ち、クラスの壁を越えてそれらを他の保育者と共有することが有益。



〈課題解決に向けた取り組みから〉

良い実践を園でより広く共有するための同僚性の構築を目指して園内研修に取り組んだ。

子どもの姿を指針・要領に照らして保育者間で対話と思考を重ねることで、指針・要領を共通言語とし、指針・要領と仲良くなることで、実践につながる理念の共有を図った。

一つ一つの取り組みは保育者の負担に配慮してできるだけささやかに進めつつ、それを継続的に実施することを重視して、保育の質が確かなものとなるよう取り組んだ。

職責や経験年数等に囚われずに全員のすべての言葉をお互いに大切にするようにして、対話の際には、「意見を言う」というより「別のオプションを示唆する」といった、選択肢を増やすイメージを共有して、話しやすく

なるよう努めた。

ただ話しやすいというだけでなく、「保育の専門家として」ということを常に念頭に置き、子どもの姿の写真を見てただ個人の感想を出し合うといった「会話」に留めず、指針・要領の言葉を専門家の視点として活用して、実践の変化につながる「対話」としていくことが大切。

保育の具体的な行動を少し変化させて（例えば、立ったまま子どもに指示をする→しゃがんで子どもの目の高さで話を聞く、など）、子どもの変化に関心を持つことで、「目には入っているが十分に見取っていない」子どもの姿を「意識して見る」ようになり、子どもの見え方が、つまりは子ども理解が大きく変わってくる。

こうした、ささやかな取り組みの日々の継続が、保育の質を高め、子どもの育ちをより保障するための、保育者どうしのコミュニケーションにつながっていく。

外部講師が「正解」を持っていると考えて、その言葉や考えに依存するのではなく、保育者が自律的な専門家として自分たちなりの答えを探しながら保育を高めていくような園＝チームとしていきたい。